

「史記」にあらわれた「俠」の概念について

君島 淳

一、はじめに

本稿では、「史記」にあらわれた「俠」の概念について取り扱う。中国の正史の中で、「史記」「漢書」には「游侠列傳」が立てられている。だが、以後の正史中に、独立した列伝として「游侠列傳」を確認することはできない。これは、前漢までの社会の中で「游侠」が、特異な、無視できない存在であったことを示すものである。

この「游侠」に関して、従来、歴史学の立場からは多くの先学の業績が存在する。

例えば、宮崎市定氏は「游侠に就いて」^(注1)において、「夾」字が刀の鞘を示し、「缺」が「劍」の同意語であり、日常坐臥にも携帯すべき佩刀を指すとされている。

その上で、人物を表す「俠」の字義については、「即ち缺[○]を帯する者が俠であり、恰も我国で『長脇差』を帯する者が、『長脇差』を以て呼ばれたるが如くであろう。」

(○印著者)^(注2)と述べられ、「缺」を帯びている人物が「俠」字で表現されたと定義づけておられる。さらに宮崎氏は、春秋末から戦国期にかけて、「士」が定まった祖国を有さず、自ら主人を選んで仕える風習があった点を指摘され、この祖国から遊離した「士」を「游侠」の起源とされている。

或いは、増淵龍夫氏は、「漢代における民間秩序の構造と任俠的習俗」^(注3)において、「游侠」の行動を支える個人的信頼関係が、当時の社会状況の中で如何に機能したかを明示することで、漢代までの民間における秩序が「任俠的習俗」によって維持されたことを証明して

おられる。

「游侠」の歴史的な側面、即ちその起源、実態、社会的機能等に関しては、これらの歴史学の業績には依拠すべき点が多い。だが、これらの研究が「史記」の資料性という点を重視する余り、司馬遷という一個人を通して捉えられ、「史記」の中にあられた「游侠」の概念を言及し尽くしたとは言いい切れないと考える。

また、司馬遷が「史記」著作のうえで意図したことを考察しつつ「史記」構成上の問題と関連付けて、改めて「游侠列傳」を捉えてみる、という点についてはまだ議論の余地がありそうである。

そこで本稿では、まず、「史記游侠列傳」の用例を細かく検討し、そこにあらわれる司馬遷の人間描写の共通点を考察していく。さらにこの点を考慮しつつ「史記」構成上の問題との関わりを頭に置きながら、「史記」の中で「游侠列傳」以外にも確認できる「俠」の用例を検討し、「史記」にあらわれた「俠」の概念を明らかにしていきたい。

二、游侠列傳について

司馬遷は「太史公自序」で「游侠列傳」について次

のように述べている。

救人於厄、振人不贍、仁者有采。^(註三)不既信、不倍言、義者有取焉。作游侠列傳第六十四。

(史記卷一百三十四 太史公自序第七十)^(註三)

この記述では「游侠」の「他人の苦難、貧窮を救い、信用を失わず、言葉に背かない」等の点が、「仁」「義」を実践する者であれば採り入れるべき人間のあり方であると示され、それが立伝の理由とされている。

また、「游侠列傳」の冒頭では、司馬遷のいわば「游侠観」とも言うべき考えが示される。そこでは、

今游侠其行雖不軌於正義、然其言必信、其行必果、已諾必誠、不愛其軀、赴士之隄困、既已存亡死生矣。而不矜其能、羞伐其德、蓋亦有足多者焉。

(史記卷一百二十四 游侠列傳第六十四)

とある。「游侠」の行為が「正義」に軌わないとの限定付きではあるが、「游侠」の言葉は信頼でき、彼らが行動を起こせば必ずやり遂げ、すでに承諾すれば必ず誠意を込めて物事を成す。己の身を惜しむことなく、士の困難に赴き、死の危機に陥るような所へ行くのも厭わない。さらに物事が達成されても、自分の能力を、または徳を自慢することはない、などと多様な「游侠的精神」を評価すべきものとして列挙している。

或いは、列伝に載せられた各人物の伝記を記す直前では、次のように述べている。

以余所聞、漢興有朱家・田仲・王公・劇孟・郭解之徒。雖時扞當世之文罔、然其私義廉潔退讓、有足稱者。

(同前)

朱家以下の「游侠」の人物達が、時に当時の法律を犯す存在であった事実を示しつつ、その「私議」が「廉潔退讓」であり、称賛すべき部分があった、とある。さらに、

至如朋黨宗彊、比周設財役貧、豪暴侵凌孤弱、恣欲自快、游侠亦醜之。

(同前)

と、仲間と共謀して貧しい者を役使し、欲の赴くままに振る舞い満足する、という行為に対して、彼ら「游侠」達は愧づべきことだと考えた、とある。

一方、「漢書游侠列傳」は「史記游侠列傳」の朱家以下の人物の伝記をほぼそのままの形で収め、漢代におけるその後の「游侠」の伝記も追録している。だが、「漢書」では「史記」の冒頭部分を削り、新たに「郭解の倫」に対し、

以匹夫之細、竊殺生之權、其罪已不容於誅矣。

(漢書卷九十一 游侠列傳第六十二)

と述べ、彼の存在を厳しく非難している。また、「漢書

司馬遷傳」では、

論大道則先黃老而後六經。序遊俠則處士而進姦雄。述貨殖則崇執利而羞賤貧。此其所蔽也。

(漢書卷六十二 司馬遷傳第三十二)

と述べ、「史記」の「游侠」に関する叙述に対して否定的な態度を示している。

以上のように「史記」における「俠」は「漢書」のように一方的に否定されるべき存在として描かれてはいない。とすると、当然その理由となる点があるはずである。司馬遷が単に「游侠」の果敢な行動やそれを支える精神に共感し、評価したとも捉えられるが、このような理解では皮相的な感を免れない。では一体、如何なる点に注目して司馬遷の「游侠観」を解釈していけばよいのか。さらに考察を進めよう。

「游侠列傳」に立伝されたのは、皆な漢代に生きた人物である。一体「游侠」は漢代にしか出現しなかったのか。司馬遷は列伝の冒頭で次のように述べる。

古布衣之俠、靡得而聞已。近世延陵・孟嘗・春申・

平原・信陵之徒、皆因王者親屬、藉於有土卿相之富厚、招天下賢者、顯名諸侯。不可謂不賢者矣。比如順風而呼。聲非加疾、其執激也。至如閭巷之俠、脩行砥名、聲施於天下、莫不稱賢。是爲難耳。然儒墨

皆排擯不載。自秦以前、匹夫之俠、湮滅不見。余甚恨之。
(同前)

古の布衣の俠についてはわからないが、近世では、戦国の四君子が「有土卿相」の俠として存在していた。だが、彼らは王者の親屬であり、名を諸侯に顕わすのは当然であった。秦以前の閭巷の俠については、彼らが行いを修め名を磨き、名声が天下に知られ、賢者と称賛されぬ者はなかったのに、儒家や墨家が排斥して記録しなかったために歴史の中に埋もれてしまい、大變遺憾である、という。この記述からすると、秦以前の閭巷の俠を採り挙げないのは儒家、墨家が記録しなかったためとされている。この点について、伊藤徳男氏、『史記』雑伝の研究(上)^(註)に次のような指摘がある。「司馬遷が先秦の閭巷の俠を採りあげない理由は、儒墨が記録しなかったことが確かであるとしても、他面、有土卿相の俠におおわれて、閭巷の俠にみるべきものがなかったためと理解されよう。しかし游侠の真髓を庶民の世界に認め、みずから『閭巷の俠の如きに至つては、行ないを脩め名を砥き、声、天下に施き、賢と稱せざるもの莫し。是れ難しと為すのみ。』といっている司馬遷にしてみれば、確実な記録はなかったとしても、拠るべき伝聞がなかったとは言いきれないで

あろう。伝聞にも拠るべきものがあれば、時に採録を憚らないのが、司馬遷の一つの態度であった。したがって秦以前の游侠を採りあげず、その名すら伝えない理由は、他にあるのでなからうか。」伊藤氏はその理由を、司馬遷が漢代の游侠を採り挙げることによって、郭解の悲劇的かつ痛憤に耐えぬ事件を、同時代の目の前の儒と対比させて、儒対俠の重要な象徴としてみる意図があつたためだとされている。今ここでは、儒と俠の対比については問題を保留して、司馬遷が捉えた、閭巷の俠を採録する際の「拠るべきもの」とは何であつたのか、次に「史記」の記述からそれを探っていくたい。

「游侠列傳」の末尾では、郭解の伝記の後、郭解以後の「游侠」達の名が列举される。

自是之後、爲俠者極衆、救而無足數者。然關中長安樊仲子、槐里趙王孫、長陵高公子、西河郭公仲、太原鹵公孫、臨淮兒長卿、東陽田君孺、雖爲俠、而逡逡有退讓君子之風。至若北道姚氏、西道諸杜、南道仇景、東道趙他羽公子、南陽趙調之徒、此盜跖居民閒者耳。曷足道哉。此乃鄉者朱家之羞也。(同前)

ここでは郭解以後にも、「俠」の風が盛んであつたが、採り挙げるべき人物がいなかったとある。にもかかわ

らず、「俠」の人物として名前のみが列挙されているのだが、この点について、今鷹眞氏は「司馬遷の微辭」^(註七)で次のように述べておられる。「樊仲子等の君子の風がある俠と、姚氏以下の盜跖に類する俠との間には、出身地と姓名の書き方について明らかに差別がある。

このうち趙他羽公子だけは、前後の人物と呼び方が異なり疑問が残る。二人の姓名とする説、趙が姓、他羽が名、公子が字だとする説等があつてはつきりしないし留保の必要があるが、その他の人物については敬意のあるなしで書き方を變えているように思われる。」この指摘にあるように、司馬遷の描写の中には、同じ「俠」という類型に入れられるべき人物に対する評価の違いが見られるのである。

では、具体的にどのような点で評価が分かれているかというと、この用例においては前半部に挙げられた「俠」の人物については「退讓君子」であつたとある。「退讓君子」という表現は、漢代の「游侠」の称賛すべき私義であつた「廉潔退讓」という表現と類似した表現である。以上のことからすると「廉潔退讓」「退讓君子」の風を具えた「俠」の人物を、積極的に採り挙げ、後世に名を伝えんとしたとの意識が窺えるのである。

それでは次の章で、今指摘した点を具体的に確認するため、「游侠列傳」に立伝された「俠」の人物達に関する記述について考察を加えていく。

三、游侠列傳中の人物達

(一)、朱家

「游侠列傳」の最初に、具体的な人物として立伝されたのは朱家である。

魯朱家者、與高祖同時。魯人皆以儒教、而朱家用俠聞。所藏活豪士、以百數。其餘庸人、不可勝言。

(史記卷一百二十四 游侠列傳第六十四)

朱家は、魯で「俠」を用いて有名であり、匿い命を救つた者は百単位で数えられたと記される。つまり、「人の困難を救う」行為、即ち「太史公自序」の中で「仁者」が採り入れるべき行為とされた「人を厄より救ふ」行為の具体的な実践が示される。続いて、

然終不伐其能、諷其德。諸所嘗施、唯恐見之。振人不贍、先從貧賤始。家無餘財、衣不完采、食不重味、乘不過鞦牛。

(同前)

と、自らの能力や徳を自慢せず、以前世話をした者と会うのを嫌い、人を助ける場合には貧しい者を優先し

た、と記される。さらに、財産も無く、贅沢はしなかった、という。

以上の記述は、まず自らの能力や徳を自慢しない点を述べ、朱家の「謙虚さ」を示し、続いて、財産も無く、贅沢な暮らしぶりではなかった点を述べ、彼の「金銭的、物質的寡欲さ」を示したものと捉えることができる。つまり、これらの点に「廉潔」かつ「退讓」である「俠」の人物を伝えんとする司馬遷の意図が窺えるのである。さらに、

既陰脱季布將軍之阨、及布尊貴、終身不見也。自關以東、莫不延頸願交焉。

(同前)

と、季布を救ったことが記され、他人の苦難を救うエピソードが示されている。また、季布が高い地位に就くと、一生会わなかったと記されている。これもさきと同様に、自分が世話した人物に対し、距離を置き、恩着せがましいことなどしなかったという、「退讓」に通じる態度をとった点が確認できる。そして最後に、關以東の者が強く交際を願うと記し、朱家に庶民の間で人望があつた事実も示されている。

(二)、田仲

朱家の後には田仲の記述が続く。

楚田仲以俠聞。喜劍。父事朱家。自以爲行弗及。

(同前)

田仲の記事は非常に短く、「廉潔退讓」という観点から確認すべき内容はみられない。

(三)、劇孟

次に劇孟の記述が続く。

周人以商賈爲資、而劇孟以任俠顯諸侯。吳・楚反時、條侯爲大尉、乘傳車將至河南。得劇孟、喜曰、吳・楚舉大事、而不求孟。吾知其無能爲已矣。天下騷動、宰相得之、若得一敵國云。

(同前)

劇孟は「任俠」で諸侯の間で有名であつた。條侯周亜夫が、吳・楚七国の乱の際、劇孟を味方につけたことを、一敵国を得たかのように喜んだ、とある。軍の責任者である人物が、劇孟に対し高い評価を下していることを記し、「任俠」である彼が、当時の政治の動向にも影響力を持つ程の勢力があつた点を示している。続いて、

劇孟行大類朱家。而好博、多少年之戲。然劇孟母死、自遠方送喪、蓋千乘。及劇孟死、家無餘十金之財。

(同前)

と、母の葬儀の車が千乗もあつたことを記し、やはり

劇孟の勢力の多大さを示している。また、ここでも朱家の、「家に財を餘す無し」という描写と類似した、「金錢的寡欲さ」が示されている。「廉潔」という概念に通じる「寡欲さ」を、朱家と同様な表現を用いて繰り返し、強調しているのである。

ところで、劇孟の母の葬儀に関する記述は「袁盎量錯列傳」にもみえる。この篇では、袁盎が劇孟を厚遇するのを、安陵の富人が何故かと尋ね、袁盎は劇孟の母の葬列の話を書いて、劇孟が人よりも秀でた所があるためである、と言い、逆に富人の周辺の者たちは頼りにならないと罵った、とある。袁盎は、「史記」を概観すると、「俠」の人物と密接な関わりを持つてしばしば現れる。「史記」の中で、袁盎は「俠」の人物である、との明らかな記述は無い。だが、個々の用例を確認すると、彼が「俠」の精神に理解を示す人物として描かれている事に気付く。この点については後に確認していく。

(四)、王孟

劇孟に続いては、王孟の記述がある。

而符離人王孟、亦以俠稱江・淮之間。

(同前)

田仲と同様に短い記事で、彼についての詳しい、具體的な行為は確認できない。

(五)、郭解

次に郭解の伝記について記述の順に考察を加えていく事にする。

解爲人短小精悍、不飲酒。少時陰賊、既不快意、身所殺甚衆。以軀借交、報仇藏命、作姦剽攻不休。及鑄錢掘冢、固不可勝數。適有天幸、窘急常得脫、若遇赦。

(同前)

まず、郭解の若い頃の人物像が記され、手に負えぬ暴れ者であった点が示される。次に、自分の身を擲つて他人を救うという、果敢な行動があった点が示されている。それと同時に、郭解が行った具体的な悪事も記されていく。確かに悪事を働く「游侠」は、社会にとつて否定されるべき存在であろう。だが、歴史の中に採り挙げるべき存在であったのは必然性があったからである、と次のように記される。

及解年長、更折節爲儉、以德報怨、厚施而薄望。

然其自喜爲俠益甚。既已振人之命、不矜其功。其陰賊著於心、卒發於睚眦如故云。而少年慕其行、亦輒爲報仇、不使知也。

(同前)

郭解は歳をとると以前の態度を改め、徳で怨みに報いるようになる。若い頃の、悪事の限りを尽くした彼の姿とは違い、「退讓」の風格を具えた「游侠」の人物となつたのである。さらに、「厚く施し薄く望む」とあり、彼が利益に対し寡欲であつた点も示されている。

そして「少年其の行を慕ひ」とあるように、郭解の人の望の厚さも示されている。

その後によく記述では、郭解にまつわるエピソードが述べられている。まず、彼の姉の子が殺された時、殺されるだけの不遜な言行をしたのだから殺した者に非はないとし、相手を許したと記される。ここには、私怨に流されずに冷静、かつ公正な態度をとつた彼の人物像が示されている。次に、彼に対し無礼な態度を見せた人物に対し、それは自分の不徳の致すところだ、と自責するばかりか、その男の賦役を免れさせてやつたと記される。ここでは、非は自分の徳の無さにあるとする、「退讓」に通じる謙虚さが示されている。また、雒陽の仇同士を地元の顔役の面目を潰さずに仲裁した記述がある。ここでも他人の立場へ気配りし、話が纏まっても何の見返りも要求しない、謙虚で寡欲な姿が示される。さらに、慎みを忘れまいと努め、乗車したまま県の役所に入ろうとしない。近隣の郡国に行つて

依頼をする際に、双方が納得してから酒食に手を付けた、などの記述がある。これらの記事も郭解の心配りの細やかさ、即ち「退讓」の風を伝えるものである。そして、次に続く記述では、

及徒豪富茂陵也、解家貧不中訾。吏恐不敢不徙。

衛將軍爲言、郭解家貧不中徙。上曰、布衣權至使將軍爲言。此其家不貧。解家遂徙。諸公送者出千餘萬。

(同前)

と、郭解の家が茂陵に移される時の話が記される。衛將軍が郭解のために弁護をしたが、庶民の分際で、將軍にそこまで言わせるとは、郭解が貧しいわけがない、とされた。結局、郭解が茂陵に移される際、諸侯は千余万も餞別を贈つたという。ここでは、実際に郭解が貧しかった事実が述べられている。これは当然彼が、「厚く施し薄く望む」人物であり、他人のために金銭を惜しみなく使つたためと考えられる。つまり、この記事によって再び郭解が寡欲であつたことを、即ち「廉潔」であつた彼の姿を強調しているのである。

本章では「游侠列傳」中に採り挙げられた人物の記述を中心に考察してきたが、以上のことから、次の点が指摘できよう。

司馬遷は無闇に「游侠」を賛美しているわけではな

い。それは、行為自体が法禁を犯す、と述べたり、郭解の場合では具体的な悪事の内容を記していたりする点などに示されている。本来ならば社会の中で否定されるべき「游侠」ではあるが、と限定しつつ、個々の人物を描く際には、採り挙げるべき点、評価できる点を他の「游侠」と区別して記したのである。つまり、これまで確認してきたように、「游侠列傳」という一つの枠組みの中で「廉潔退讓」「退讓君子之風」と表現された、「金銭的、物質的寡欲さ」や「他人への心配り」「謙虚さ」を具えた「俠」の姿を示し、司馬遷にとつて、人間としての理想的な姿を、それらの「游侠」の行為の中に見出そうとしたのである。

四、「史記」にあらわれた「俠」について

本章では前章で確認したことを頭におきつつ、「游侠列傳」以外の「史記」における「俠」の用例を検討し、「史記」構成上の問題と関連付けて考察を加えていきたい。

(一)、「史記」の構成と「俠」の精神

まず、特定の個人に対しての記述ではない「貨殖列

傳」の用例から検討していく。

1 楊・平陽・陳、西賈秦・翟、北賈種・代。種・代、石北也。地邊胡、數被寇、人民矜懷怯、好氣、任俠爲姦、不事農商。

(史記卷一百二十九 貨殖列傳第六十九)

ここでは、種、代地方の気風を伝える記述で、「任俠姦を爲す」と、「俠」が悪事を働いていたことが示されている。

2 北通燕・涿、南有鄭・衛。鄭・衛俗與趙相類。然近梁・魯。微重而矜節。濮上之邑徙野王。野王好氣任俠、衛之風也。

(同前)

ここでも野王地方で「好氣任俠」であるのは衛の遺風であることを伝える記述である。

3 潁川・南陽、夏人之居也。夏人政尚忠朴、猶有先王之遺風。潁川敦愿。秦末世遷不軌之民於南陽。南陽西通武關・鄖關、東南受漢・江・淮。宛、亦一都會也。俗雜。好事業、多賈。其任俠、交通潁川。故至今謂之夏人。

(同前)

宛地方の「任俠」が潁川と行き来があったことを伝える記述である。

これらの用例では、司馬遷の積極的な「俠」への評価を確認することはできない。むしろ、1の用例で「任

俠爲姦」とあるように、悪事を働く「俠」の存在が確認できるだけである。さらに「任俠」の姿について、具体的に言及している記述が次のようにある。

4 由此觀之、賢人深謀於廊廟、論議朝廷、守信死節、隱居巖穴之士、設爲名高者、安歸乎。歸於富厚也。是以廉吏久久更富、廉賈歸富。富者人之情性、所不學而俱欲者也。故壯士在軍、攻城先登、陷陣卻敵、斬將奪旗、前蒙矢石、不避湯火之難者、爲重賞使也。其在閭巷、少年攻剽椎埋、劫人作姦、掘冢鑄幣、任俠并兼、借交報仇、篡逐幽隱、不避法禁、走死地如鶩者、其實皆爲財用耳。(同前)

ここでは、「富」は人間の情性として誰でも欲するものだ、という主張がみられる。壮士が戦場で危機を顧みない活躍をみせるのも、莫大な恩賞がそうさせるのだ。それ故「任俠」が友を助けるために仇討ちをしたり、法禁を犯すのを意にも留めず、自分の命が危うくなる所へも赴くのは、すべて財物が目当てなのだ、と述べている。つまり、「貨殖列傳」では、「任俠」は結局「富」のために自らの命を投げ出すような行動をするのだ、と非常に否定的な考えが示されているのである。

この、「任俠」の否定的な姿を伝える記述では、「攻剽椎埋し、人を劫かして姦を作し、冢を掘り幣を鑄す」

とある。「游侠列傳」中の郭解の記事で「命を藏し姦を作し、剽攻して休まず。錢を鑄し冢を掘るに及んで、固より勝けて數ふべからず。」とあるのと、ほぼ同一の内容を伝える記述である。とすると、「俠」の反社会的な行為自体は「貨殖列傳」の「俠」も「游侠列傳」の「俠」も本質的に変わりはない、ということになる。では「貨殖列傳」中にみられる否定的な「俠」の姿と「游侠列傳」中にみられる肯定的な「俠」の姿との違いは一体どのような点にあるのか。

「貨殖列傳」とは周知の通り、資本のうえではほぼ無一物の状態から経済活動を始め、利殖のために努力し、富を獲得、維持、拡大し得た庶民の姿を描いた列傳である。つまり、世俗的利益の象徴である金錢に貪欲な人間の姿を描写することがテーマとなっている。

一方、司馬遷が評価し、「游侠列傳」中に採り挙げた「游侠」達の共通点といえば「廉潔退讓」、即ち「金錢的、物質的利益への寡欲さ」或いは「謙虚さ」であった。つまり、「貨殖列傳」における否定的な「俠」は、司馬遷にとって「廉潔退讓」という概念の対極に位置し、「游侠列傳」で「曷ぞ道ふに足らんや」と言われる部類に属する「俠」なのである。

ところで、「貨殖列傳」は「史記」では「太史公自序」

を除くと列伝の最後に位置している。このような列伝の配列の問題に関して、司馬遷が評価した「俠」の「廉潔退讓」という概念に着目し、列伝構成上の問題に関連付けて、多少検討しておきたい。

例えば、「貨殖列傳」に対して列伝の最初に位置している「伯夷列傳」には、周代の伯夷・叔齊の伝記が載せられている。彼ら二人の事跡を伝える記述は簡単に非常に短い。要するに、二人が当時の世を忌み嫌い、首陽山に隠れ住んで餓死した、と記されているだけである。特記すべき功績も無いこの二人を、司馬遷が列伝の最初に位置させるとは、何か意図することがあつたに違いない。列伝中の記述では、

其傳曰、伯夷・叔齊、孤竹君之二子也。父欲立叔齊。及父卒、叔齊讓伯夷。伯夷曰、父命也。遂逃去。叔齊亦不肯立而逃之。國人立其中子。

(史記卷六十一 伯夷列傳第二)

とあり、二人とも父の後嗣となるのを譲りあい、結局国を逃れ、自分達の有していた国家の継承権を放棄しているのである。つまり、彼らは、人間にとつての最大の権益というべきものを拒否したのだといえる。続いて司馬遷は、

積仁聚行、如此而餓死。

(同前)

と、名利を追求することなく、自らの信義に従って行動した人物が、結局は滅んでしまった姿を強調するのである。さらに司馬遷は論語の中の孔子の言を引き、孔子曰、伯夷・叔齊、不念舊惡、怨是用希。求仁得仁、又何怨乎。

(同前)

と、孔子が二人の行為を称賛し、伯夷・叔齊からこそが理想主義的儒教の体現者であった、と捉えていたことが示されているのである。このような人物たちが歴史の中に埋もれてしまつてもよいのか。司馬遷は列伝の末尾に次のように述べる。

伯夷・叔齊雖賢、得夫子而名益彰。顔淵雖篤學、附驥尾而行益顯。巖穴之士、趣舍有時。若此類名湮滅而不稱、悲夫。閭巷之人、欲砥行立名者、非附青雲之士、惡能施于後世哉。

(同前)

伯夷・叔齊は孔子のおかげで名が彰われた。顔淵は名馬の尾に附くが如く行が顕われた。岩屋に隠れ住む士が世に出るかどうかは時運による。この類の者で名が埋もれて称賛されない者がいる。悲しいことだ。庶民達は、行いに励み、名を立てようとしても青雲の士に附かない限り、後世に伝えられることなど無い、とある。ここには、伯夷・叔齊のような、己の義に従った人物を積極的に自らの著作に採り挙げ、後世にまで

伝えようとする司馬遷の意識が示されているのである。

そして、この「伯夷列傳」での表現は「游俠列傳」中の

至如閭巷之俠、脩行砥名、聲施於天下、莫不稱賢。是爲難耳。然儒墨皆排擯不載。自秦以前、匹夫之俠、湮滅不見。余甚恨之。

（史記卷一百二十四 游俠列傳第六十四）

という表現と非常に類似している。この記述を「伯夷列傳」との対応で考えてみるならば、伯夷・叔齊は孔子によつて名を後世に残す事ができた。一方、「游俠」達はこれまで儒墨に排斥されて歴史の中に埋もれてきた。本来ならば社会的に否定されるべき「游俠」の中にも採り挙げるべき人物はいる。後世に名を残すことをするのは外でもない司馬遷自身である、との決意が読みとれるのである。さらに「游俠列傳」では次のように述べる。

鄙人有言曰、何知仁義、己（ま）饜其利者爲有徳。

伯夷醜周、餓死首陽山、而文・武不以其故貶王。跖・躡暴戾、其徒誦義無窮。由此觀之、竊鉤者誅、竊國者侯。侯之門、仁義存、非虛言也。

（同前）

「仁義」なぞ知ることがあるか。自分に利益を与

えてくれる者に「徳」があるのだ。伯夷・叔齊が餓死しても、文王・武王の王としての名声は揺るぎ無いものであったし、跖・躡は暴戾であつても、子分達は義を称賛し続けた。鉤を盗んだ者は誅され、国を盗んだ者は侯となる。侯の側に「仁義」があるとは虚言ではない、という。司馬遷は、現実社会の中で目の当たりにする「仁義」は、見てくれだけの空虚な「仁義」である、と痛烈に批判しているのである。

また、司馬遷は「太史公自序」で、次のように述べている。

末世爭利、維彼奔義、讓國餓死、天下稱之、作伯夷列傳第一。（史記卷一百三十 太史公自序第七十）

「末世」が利を争っている時に、彼らだけが義に従う行為をした、というのである。世俗的な權益に対して算欲で、「義に奔った」伯夷・叔齊は列伝の最初に置かれ、金銭的、物質的に食欲で、「利を争った」人々を描いた「貨殖列傳」は列伝の最後に置かれている。「列傳」という大きな枠の中でこれらの両者を見た時、非常に対称的な人間の類型が浮かび上がってくるのである。

さて、今、司馬遷が、見てくれだけの空虚な「仁義」を批判した、と指摘したが、それでは司馬遷は一体自

らが依拠すべき「仁義」をどのように捉えていたのか。この点について再び「俠」に関連付けて、次の項で考察を加えていきたい。

(二)、「仁」「義」について

第二章の冒頭でも確認したが、司馬遷は「游侠」の行為の「人を扈より救ひ、人の贍らざるを振ふ」点を「仁」を実践する者が取り挙げるべきものと捉え、「信を既はず、言に倍かざる」点を「義」を実践する者が採り挙げるべきものだとして捉えている。つまり「游侠」の具体的な行為が、儒教の徳目である「仁」「義」という語で表現しうる、と示しているのである。「史記」では「游侠列傳」以外の世家、列伝中の様々な地位、立場にある人物達に対し、「俠」と表現される箇所が確認できる。そこで今、「史記」全体における「俠」の用例を概観し、そこにあらわれる「仁」「義」に関わる共通点を検討していく。なお、論述の便のため、用例別に「爲俠」「好俠」など、類似の表現を纏めて扱う事にする。

1、「爲俠」など

①、張良

張良の祖父、父は共に韓の大臣であった。韓が秦に

破られたため、張良は仇に報いようとして始皇帝の暗殺を計画するが失敗し、下邳に逃れた。そこで次の記事がみられる。

居下邳爲任俠。項伯常殺人、從良匿。

(史記卷五十五 留侯世家第二十五)

人を殺した項伯が、「任俠」の人物、張良に匿ってもらったとあり、「人を扈より救ふ」という「仁者」が採りあげらるべき「任俠」の行為の実践が示されている。

一方、「言に倍かず」という点に関しては、張良が黄石公と出会った時の記述に確認できる。

黄石公が敬意に張良の前で履を橋の下に落とし、張良の反応を見ようとした。張良は怒りを抑え、黄石公に履をはかせた。そして次のようにある。

父去里所、復還。曰、孺子可教矣。後五日平明、與我會此。良因怪之、跪曰、諾。(同前)

黄石公と約束を交わす張良の返事の表現に、「諾」の語が使われている。この「諾」とは「游侠列傳」で「已諾必誠」と、「游侠」が承諾したことに必ず誠意を込めて対処すると、評価すべき行為として示されている。

「留侯世家」では「任俠」の人物、張良が「諾」と返事し、その後約束を破るまいと、何度も黄石公に会うために足を運ぶ彼の姿が描かれる。「諾」と言ったこと

への責任を果たしているのである。つまりこの行為は「言に倍かず」という「義者」が採りあげべき「俠」の行為の実践であると捉えることができる。

②、季布・季心

次は「季布欒布列傳」の用例を検討する。まず、季布の用例から確認する。

季布者、楚人也。爲氣任俠、有名於楚。項籍使將兵、數窘漢王。及項羽滅、高祖購求布千金。敢有舍匿、罪及三族。季布匿濮陽周氏。

(史記卷一百 季布欒布列傳第四十)

「任俠」の人物として楚で有名であった季布は、千金の懸賞金で追求され、濮陽の周氏のもとに逃れた。季布は周氏の策により奴隸の姿に身なりをやつし、「游俠」の人物、朱家の所へ売られていく。朱家は季布を救うため、漢の重臣、滕公の所へ行き説得を試みる。

汝陰侯滕公、心知朱家大俠、意季布匿其所。迺許曰、諾。待間、果言如朱家指。(同前)

季布を匿えば三族に罪が及ぶにもかかわらず、季布を許すよう朱家が説得し、滕公は、高祖への諫言を承諾した、とある。滕公が漢の重臣であったことを考えると、両者のこの行為には社会的な「法」を超越した要因の存在が示されている。その要因とは即ち「俠」

の信念であり、それは自分の社会的な地位や立場を度外視してでも守り通さねばならない、個人的な信頼関係に基づく精神であったといえよう。

なお、ここでも朱家に対する滕公の承諾の語として「諾」という語が用いられている。「俠」と明記された者が発した言葉ではないが、朱家が「大俠」だと知っていた滕公が、朱家に対して敢えて「諾」と答えたということになる。「諾」の語を以て承知するとは、滕公の態度は、「俠」の精神と同等の決意を表明するものであるといえる。

さらに、この「諾」の語に関して季布の伝記中に用例がみえる。曹丘生の悪評を聞いていた季布は、竇長君を諫め、曹丘生と交際しないように言う。一方、曹丘生は季布に会おうとするが、竇長君に止められる。結局曹丘生は書を先に出して季布に会いに行つた。その場面は次のようである。

曹丘至。即揖季布曰、楚人諺曰、得黄金百斤、不如得季布一諾。足下何以得此聲於梁・楚間哉。且僕楚人、足下亦楚人也。僕游揚足下之名於天下、顧不重邪。何足下距僕之深也。季布迺大説、引入留數月、爲上客、厚送之。季布名所以益聞者、曹丘揚之也。

(同前)

曹丘生が用いた諺に、季布は喜び、彼への待遇を改めている。さらに、後の記述では、

當是時、季心以勇、布以諾、著聞關中。（同前）

とあり、季布が「諾」を以て実際に有名であったことが記されている。彼が「諾」に象徴される「俠」の精神の保持者として、自尊心を抱いていたことが示されているのである。

次に季布の弟、季心の例を確認する。

季布弟季心、氣蓋關中。遇人恭謹、爲任俠。方數千里、士皆爭爲之死。嘗殺人、亡之吳、從袁絲匿。

長事袁絲、弟畜灌夫・籍福之屬。

（同前）

まず、季心が「遇人恭謹」と、謙虚な人物であったことが示される。方數千里の「士」が彼のために死をも辞さないとあり、ここでは「俠」の人物としての季心に人望があり、彼と「士」の間に個人的な信頼感が存在していた点が示されている。以前人を殺して逃亡し、袁盎に匿ってもらったとある。第三章（三）で指摘しておいたように、袁盎が「俠」の人物である季心の困難を救った存在として現れる事を確認しておく。

③、寧成

次に寧成の用例をみることにする。寧成は苛酷な法律運用を行った官吏達の伝記を集めた「酷吏列傳」に

立伝されており、彼の「俠」の人物としての姿は次のように示される。

武帝即位、徙爲內史。外戚多毀成之短、低罪髡鉗。

是時九卿罪死即死。少被刑。而成極刑。自以爲不復收。於是解脫、詐刻傳出關歸家。稱曰、仕不至二千石、賈不至千萬、安可比人乎。乃賈貸買陂田千餘頃、假貧民、役使數千家。數年會赦。致產數千金。爲任俠、持吏長短、出從數十騎。其使民、威重於郡守。

（史記卷一百二十一 酷吏列傳第六十一）

寧成ほど高い地位にいた人物は、当時、極刑を言い渡されれば、刑を受ける前に自殺するのが当然であった。だが、彼は自殺するどころか、逃亡し、私腹を肥やすことに精を出し、官吏の弱みにつけ込んで、権勢を振るつたという。つまり、彼の「俠」の人物としての姿は、権力を乱用し、贅沢を追求した面が示され、司馬遷が評価している「俠」の行為は確認できない。逆に、彼が世俗的な名声や利益を追求する貪欲な「俠」であったことが強調され、否定すべき存在として描かれている。

2. 「好俠」など

①、灌夫

灌夫はさきの「季布欒布列傳」の用例にあるように、

季心が弟分としていた人物である。

夫不喜文學、好任俠、已然諾。諸所與交通、無非豪桀大猾。家累數千萬、食客日數十百人。

(史記卷一百七 魏其武安侯列傳第四十七)

ここでは「好任俠、已然諾」とあり、「任俠」を好んだ人物が「承諾したことを果たす」と記されている。

つまり彼が「言に倍かず」という「義者」が採りあげべき「俠」の行為を實踐していたことが示されているのである。さらに、彼は多くの食客を養っていたとある。この食客に関して、「史記」では「戦国の四君子」達が彼らの門下に多くの食客を養っていた記事が確認できる。例えば「孟嘗君列傳」には、

孟嘗君在薛、招致諸侯賓客。及亡人有罪者、皆歸孟嘗君。孟嘗君舍業厚遇之。以故傾天下之士。食客數千人、無貴賤一與文等。

(史記卷七十五 孟嘗君列傳第十五)

とあり、食客の中には、亡命者や罪人などがいたとされ、列伝の論贊では、

太史公曰、吾嘗過薛。其俗閭里、率多暴桀子弟、與鄒・魯殊。問其故、曰、孟嘗君招致天下任俠姦人入薛中、蓋六萬餘家矣。世之傳孟嘗君好客自喜、名不虛矣。

(同前)

とあり、本伝中で、亡人罪人の類と記されていた者達が、ここでは「任俠姦人」と描写されている。孟嘗君自身が「俠」のふるまいをしたり、好んだりしたとの具体的な記述は確認できない。だが、孟嘗君の食客に、「俠」の存在が認められることは、定まった主のいない食客と「俠」の結び付きを示しているものである。この点に関して、増淵龍夫氏は^(註)四君子と食客が結び付く理由として、経済的基盤だけでなく、より個人的な心的結合、つまり「俠」の精神に表される人格的要因を挙げておられる。

②、汲黯

次に汲黯の用例を確認する。

黯爲人性倨少禮。面折不能容人之過。合己者善待之、不合己者、不能忍見。士亦以此不附焉。然好^(學)游俠、任氣節、內行脩絮、好直諫、數犯主之顔色。常慕傅柏・袁盎之爲人也。善灌夫・鄭當時及宗正劉弃。亦以數直諫、不得久居位。

(史記卷一百二十 汲黯列傳第六十)

彼の「俠」としての具体的な行為は見られない。だが、「游俠列傳」中で閭巷の俠が「脩行砥名」に努力した点に注目すると、汲黯が「俠」の精神を好んだため、「内行脩絮」に努めようとした人物であったと捉える

ことができる。また、常に傅柏や袁盎の人と為りを慕ったとある。袁盎は、さきに「爲任俠」と表現された季心を匿った人物として記されていた。ここでは「好游俠」という汲黯が慕った人物として現れている。

3、「任俠自喜」など

①、寶嬰

寶嬰の「俠」に関する用例は、彼のおばの竇太后の伝記を載せる「外戚世家」にみえ、

吳・楚反時、竇太后從昆弟子寶嬰、任俠自喜。

(史記卷四十九 外戚世家第十九)

とあり、彼が「任俠」を自負する人物だと記されている。そして、彼の本伝では、

魏其侯寶嬰者、孝文后從兄子也。父世觀津人。喜賓客。(史記卷一百七 魏其武安侯列傳第四十七)

とあり、彼が賓客を養うことを好んだと記される。さらに、彼の人物像を伝える記述は、

乃拜嬰爲大將軍、賜金千斤。嬰乃言袁盎・欒布諸名將賢士在家者進之。所賜金陳之廊廡下、軍吏過、輒令財取爲用。金無入家者。(同前)

とあり、彼が大將軍となった際に、在家の名將賢士を推薦した、と記されている。またこの記事でも袁盎の名がみえ、「俠」を自負する寶嬰が、袁盎を「名將賢士」

であり、推薦するに足る人物だと判断したことが記されている。さらに、寶嬰は皇帝から賜った金を下役に与え、自分の家には入れなかつたとある。つまり、「俠」を自負する人物の「金銭的な寡欲さ」が示されているのである。

②、鄭當時

次に鄭當時の用例を確認する。

鄭莊以任俠自喜、脫張羽於危、聲聞梁・楚之間。

(史記卷一百二十 汲鄭列傳第六十)

ここでは「任俠」を自負した彼が、張羽の困難を救った事が記されている。この行爲もまた、「人を危より救ふ」という「仁者」が採りあげるべき「俠」の行爲の実践だと位置づけることができる。

4、「節俠」

最後に「刺客列傳」の荊軻の記事にみえる「節俠」という用例について考察を加える。「節俠」の「節」は「節操」「節義」などの熟語で用いられるように、「守るべき操、義理」という方向の意味を持つ。「節俠」とは「守るべき操、義理を有する俠」という概念を示すものと捉えることができる。

燕の太子丹は、秦に人質として行かされ、幼い頃仲の良かった秦王政に冷遇された。これを怨みに思った

太子丹は秦から逃げ帰り、秦王に報復してくれる者を求めた。太子丹は、強国秦の逆鱗に触れぬように、と諫める太傅鞠武を聞き容れず、結局、燕の處士、田光先生に相談した。田光先生は、自身が老いたのを理由に国事を図ることを辞すが、代わりに、荊軻を推薦する。まず、太子丹が田光先生に依頼する場面は次のようにある。

太子曰、願因先生得結交於荊卿。可乎。田光曰、敬諾。即起趨出。太子送至門、戒曰、丹所報、先生所言者、國之大事也。願先生勿泄也。田光俛而笑曰、諾。

（史記卷八十六 刺客列傳第二十六）

田光先生が太子丹に対して二度「諾」と返答している。最初の「敬諾」は、太子丹が田光先生の力で荊軻と交を結びたいと願い出たことに對する、田光先生の承諾の言葉である。田光先生は、困難にある太子丹を、自分の力では救うことができぬと考え、代わりに確かな人物を紹介するのに對し、「敬諾」と快く承諾したのである。二度目の「諾」の方は、太子丹が田光先生に、「勿泄」と戒めたことに對する承諾の語である。田光先生は、「俛而笑曰、諾。」と描写され、疑念を抱かれ、自尊心を踏みにじられたことへの自嘲を込めた寂しげな笑いが示されている。

田光先生はかくて荊軻のもとへ行き、彼に太子丹の所へ行くように説得し、承知させた。

田光曰、吾聞之、長者爲行、不使人疑之。今太子告光曰、所言者國之大事也。願先生勿泄。是太子疑光也。夫爲行而使入疑之、非節俠也。欲自殺以激荊卿。曰、願足下急過太子言、光已死、明不言也。因遂自刎而死。

（同前）

行いをなす時に、人に疑念を抱かせるようでは「節操ある俠」ではないと考え、田光先生は自殺をしたとある。「節俠」を自負する人物は、その自尊心を踏みにじられた時、自らの命を投げ出す程の強い信念を抱いていたのである。つまりここでは「俠」の觀念化された精神に、すでに自らの行動への強い責任感が存在していたことが確認できるのである。

五、おわりに

以上、「史記」における「俠」のあらわれ方について検討してきた。「游侠列傳」の「庶民」の「俠」のように、本来ならば社会的に否定されるべき「俠」に對し、司馬遷が高い評価を下している人物が存在するということから、「史記」に採録された「俠」の姿にどのような

な、人間として理想的な姿が描出されているか、という点について考察を加えてきた。本論中で再度指摘した通り、「游侠列傳」という枠組みの中では、「俠」の人物の「廉潔退讓」、即ち「世俗的な名利への寡欲さ」或いは「謙虚な態度」を理想視し、それを後世に伝えんとした司馬遷の意図が窺えるのである。一方、「貨殖列傳」に現れた「俠」や寧成などのように利益を追求する存在としての「俠」に対しては、司馬遷は非常に厳しい態度を示しているのである。

また、司馬遷は「俠」の評価すべき精神を、「仁者」「義者」が採りあげるべきものと記している。「史記」中に確認できる、「俠」に関係して描写された人物たちは、ほぼ共通してこれらの「仁者」「義者」が採りあげるべきとした「俠」の行為を実践した記述が確認できるのである。

注

一、宮崎市定「游侠に就て」（『歴史と地理』第三十四

巻第四・五号所収 一九三四年）

二、宮崎市定（前掲論文）

三、増淵龍夫「漢代における民間秩序の構造と任俠的習俗」第一章第一篇三秦漢の際における游侠の活躍（『橋論叢』二六ノ五所収 一九五一年）

四、瀧川龜太郎『考證』の「楓三本、乎作采」より、「乎」を「采」とした。

五、以下の用例は、瀧川龜太郎「史記會注考證」より引用した。

六、伊藤徳男『史記』雑伝の研究（上）（『東北大学中国文史哲研究会、集刊東洋学十七所収 一九六七年）

七、今鷹眞「司馬遷の微辭」（『山下龍二教授退休記念中国学論集』所収 研文社一九九〇年）

八、瀧川龜太郎『考證』に引く張文虎の説に従い、「已」を「己」とした。

九、増淵龍夫（前掲論文）

十、『考證』「漢書、無學字、此疑衍」に従い、ここでは「學」字を衍字とした。